

当事者と仲間の発信型による発達障害学生支援プロジェクト

The project of activity-support for students with developmental disability, led by a person in question and peers.

三橋 真人

Mabito Mithuhashi

健康科学大学

Health Science University

Key words: developmental disability, activity-support for students with disability, applied behavior analysis.

目的

日本学生支援機構（2011）によれば、2010年に大学等に在籍している発達障害学生（診断書有）は1,064人と報告している。診断書のない潜在学生数の把握はできず、対象学生も解らない。発達障害学生の修学支援研究は緒についたばかりである。こうした現状を踏まえ本研究では、わが国の大学等における発達障害学生の修学支援の現状を踏まえ、A大学での発達障害学生支援プロジェクトを取り上げ、当事者、学生、教職員がネットワークを作り協働する支援方法を積み上げる事を目的とする。

方法

対象者；A大学1年生、B子（広汎性発達障害アスペルガー症候群のある女子学生）。支援学生、10名。調査期間；2010年4月～9月。

B子に対する支援計画や体制がない状況、未支援期をベースラインとする。当事者学生の級友への障害のカミングアウト、さらに上級生へのカミングアウト、それを受け、上級生の支援、上級生の組織的支援（援助期）といった独立変数との対応としてみる。そして、上級生の支援・支援体制作りによるB子の行動の変化を分析する。特に上級生の学生の援助行動が上級生自身にも「正の強化」となり、最終的に大学を動かし障害学生支援委員会を立ち上げる援護活動になったことを実践報告する。

結果

B子の障害のカミングアウトを受けて、筆者のゼミ生が、B子の大学生活の支援をしたいと申し出て、

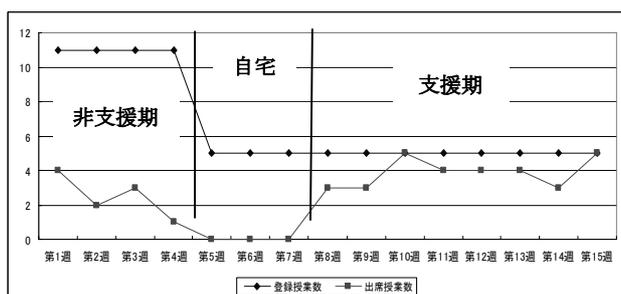


Figure1

障害学生支援サークルをつくり、大学に対し、大学側は障害のある学生が学びやすい環境をつくることや、障害学生の修学支援サービスを整備することに積極的に取り組むべきであると考えた。上級生が援護活動を行った。Figure1は、非支援期をベースラインとする。上級生や筆者の介入期が支援期である。

考察

B子の支援学生（上級生）達が果たした役割を分析する。1）B子の授業支援・就学支援を行い、B子の大学適応への役割を果たした。2）上級生がB子の級友に、B子の支援活動を指導したことが、B子の級友たちのコミュニケーションを促進させ、副次的にB子の支援学生達はB子の級友も同時に支援することになった。3）障害学生に対する大学教員の理解を促した。支援学生がB子の授業支援で一緒に教室に入り、ノートテイクや見守り等の支援する姿を見て、教員の意識が変化した。4）社会福祉学部長・心理学部学部長に直談判をして、大学内に「障害学生支援委員会」という公的な委員会を立ち上げた。5）支援学生は、B子の支援という個別的な活動で終わらせるのではなく、特別な支援を必要とする学生が入学した時に対応できるよう、組織化を考え、大学公認サークル「障害学生支援サークル」をつくった。そこで、支援を必要とする学生に対する支援方法のマニュアル作りを行った。6）支援学生の活動が、「援助」活動であり、「援護」活動にもなっている。また、支援学生の活動は学生発信のFD活動と考えることができる。学生が学び易い環境づくりを、大学に提言し、大学と共に考え、大学教育を改善させていくものである。A大学の支援学生達はB子の支援を通し、大学の教育環境を改善させた。

引用文献

独立行政法人日本学生支援機構（2011）. 大学・短期大学・高等専門学校における障害学生の修学支援に関する実態調査について